

4. 福岡市内の公共用水域及び底質中の DDT に関する調査結果

環境科学課 戸渡 寛法・宇野 映介・豊福 星洋
松尾 友香

第 17 回水環境学会シンポジウム

DDT 類は、かつて殺虫剤として多用されていた物質であり、内分泌かく乱作用が強く推察されている。本研究では、福岡市内の公共用水域および底質中の DDT 類の調査を行った。調査の結果、水質試料はすべての物質が報告下限値未満であった。底質試料は、いずれの地点においても、DDT より分解産物である DDE, DDD の方が高濃度であった。また、底質の有機炭素濃度と DDT 類濃度には正の相関が認められた。

6. 平成 25 年度福岡市内公共用水域 LAS 調査について

環境科学課 豊福 星洋・宇野 映介・戸渡 寛法
松尾 友香

第 40 回九州衛生環境技術協議会

直鎖アルキルベンゼンスルホン酸及びその塩（LAS）は家庭用洗剤として多用されてきた物質で、水生生物への影響が懸念されており、平成 24 年度には水生生物保全に係る水質環境基準項目に追加された。これに伴い、本研究では福岡市内河川および博多湾の LAS を調査した。調査の結果、博多湾では、生物特 A 類型の環境基準値 0.006mg/L を超過した地点はなかった。河川では、生物特 A 類型の環境基準値 0.02mg/L を超過した地点があり、数地点において特異的に高濃度で検出された。

7. 福岡市内におけるゴケグモ類の生態調査

環境科学課 清水 徹也・上尾 一之・宇野 映介

第40回九州環境衛生技術協議会

福岡市では平成24年9月にセアカゴケグモによる咬傷事故が発生した。本調査では、平成24年11月に策定された「セアカゴケグモ対策行動計画」に基づきゴケグモ類の効果的駆除方策について検討することを目的として1. 地図情報システムによる分布状況の視覚化 2. 飼育調査（ライフサイクル調査） 3. 被食試験（天敵調査）を行った。

今回の調査により

1. セアカゴケグモが福岡市東区を中心に分布していることが改めて確認された。
2. 冬季はセアカゴケグモの判別が困難であり、5月から11月、とりわけ産卵して出囊する前の時期に駆除を行うのが最も効果的であると考えられた。
3. ゲジやハサミムシ等の肉食の節足動物が、セアカゴケグモの幼体を積極的に捕食することからこれらの生物が「天敵」となることが確認され、セアカゴケグモが優位に生息するのを防ぐにはこれらの「天敵」となりうる生物を死滅させないように選択的な駆除を行うことが重要であると考えられた。

10. 福岡市におけるセアカゴケグモの生息状況及び生態調査

環境科学課 宇野 映介・清水 徹也・上尾 一之

統計数理研究所共同研究「統計学的手法を用いた環境及び生体化学調査の高度化に関する研究」 研究報告会

福岡市では、2012年にセアカゴケグモによる咬傷事故が発生したのをを受けて、セアカゴケグモ対策行動計画を策定した。これに基づき、当研究所では、セアカゴケグモの生息抑制（効果的駆除）、生息域の拡大防止を目的として、セアカゴケグモの生息および生態調査を行った。

生息調査の結果、スパイダーダイアグラムの解析により、セアカゴケグモは1年間に200～300m程度移動することが推察された。

また、生態調査の結果、冬季におけるセアカゴケグモの駆除は発見・判別が困難であり、産卵して出囊する前の時期に、集中的な駆除を行うことが効果的であると推察された。また、ゲジやハサミムシはセアカゴケグモ幼体を捕食することが確認され、駆除の際は天敵を死滅させないように注意する必要があると思われた。

16. 博多湾公共用水域調査地点におけるCODと関連する有機物項目について

環境科学課 上尾 一之・清水 徹也・新田 千穂

第30回全国環境研究所交流シンポジウム

博多湾の貧酸素水塊発生状況把握のために多項目水質計による水質の垂直分布の測定を実施するとともにCODの構成要素解明のために関連項目の分析を行った。多項目水質計を用いて貧酸素水塊の発生の確認及びDO、塩分、水温の調査を実施した。

6月から9月にかけて貧酸素水塊が確認され、塩分濃度差と水温差による影響が示唆された。COD関連項目の測定結果は、冬季に比べ夏季が高く、表層で顕著であった。CODは溶存性有機炭素(DOC)＋懸濁性有機炭素(POC)、POCはクロロフィルa(Chl a)と高い相関を示した。栄養塩類は冬季に高く、CODと有機態炭素(DOC+POC)、POCとChl aが高い相関があることから、CODは有機態炭素を反映した値であり、POCの大部分は植物プランクトンであることが示唆された。

17. NAGINATA を用いた福岡市河川水質中の農薬・医薬品類スクリーニング調査

環境科学課 豊福 星洋・山下 紗矢香・松尾 友香

第 49 回日本水環境学会年会

本研究では、化学物質を一斉分析することができるソフトウェア「NAGINATA」を用いて、福岡市内河川の農薬・医薬品類のスクリーニング調査を行った。調査の結果、22 種類の化合物が $0.1 \mu\text{g/L}$ 以上の濃度で検出され、そのうち最も検出回数が多かったものは除草剤として使用されるプロモブチドであった。検出された濃度は基準値が設定されているものについては、すべて基準値の 1/10 未満であった。